Literarische Modernität und Formbewusstsein in der deutschsprachigen Erzählliteratur zu Beginn des 20. Jahrhunderts

20 世紀初頭ドイツ語圏の文学作品における文学の近代性と形式意識

（要約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D190985
氏　　名：堀田　明

Inhaltsverzeichnis

Einleitung

Kapitel I: Die Modernität in der „Aktualität der Philosophie“ Adornos: Zur Affinität zwischen der Philosophie und der Literatur

1. Einleitung
2. Die Überwindung der modernen Philosophie
3. Die Deutung „der intentionslosen Wirklichkeit“
4. Die Deutung der Konstellation
5. Die Form des Essays
6. Schluss

Kapitel II: Adornos Vortrag *Die Idee der Naturgeschichte* und die Modernität in der Romanform: Zum Bruch zwischen Ich und Welt in der erzählenden Literatur

1. Einleitung
2. Der Begriff der Naturgeschichte bei Adorno
3. Lukács’ Begriff der „zweiten Natur“
4. „Zweite Natur“ in *Die Idee der Naturgeschichte*
5. Benjamins „Vergängnis“
6. Die naturgeschichtliche Deutung der Einsamkeit
7. Schluss

Kapitel III: Das moderne Ich in Büchners *Lenz*

1. Einleitung
2. Lenz als modernes Ich
3. Entfremdung von der Natur
4. Die Angst des aufgeklärten Ichs
5. Der religiöse Konflikt
6. Der Absturz ins Nichts
7. Schluss

Kapitel IV: Klassizismus und Frühromantik:
Der Stellenwert des Romans bei Georg Lukács und Walter Benjamin
1. Einleitung
2. Geschichtsphilosophie und Klassizismus bei Lukács
3. Das Problem des Individuums bei Lukács
4. Der Begriff der Ironie bei Lukács
5. Der Stellenwert der Romanform bei Lukács
6. Die Rekonstruktion der frühen Romantik bei Walter Benjamin
7. Der Stellenwert der Romanform bei Walter Benjamin
8. Schluss

Schlussbetrachtung

Literaturverzeichnis

本論文は、ドイツ語圏における文学作品、とりわけ小説形式の位置づけについて、20 世紀初頭における思想的背景とのかかわりのなかで考察していくものである。その際、ゲオルク・ルカーチ、ヴァルター・ベンヤミン、テオドール・W・アドルノらの議論にもとづきつつ、考察を進めていく。最終的には、伝統的価値観においては批判にさらされている小説の近代性を、肯定的な指標として新たに捉えなおすことを目的とする。

序論では、ゲオルク・ルカーチの初期の著作『小説の理論』(*Die Theorie des Romans*)に言及しつつ、論文全体に対する問題提起を行う。小説という文学形式は、その成立以降、近代性という概念と密接にかかわっているが、ルカーチは『小説の理論』において、古典時代の叙事詩から近代の小説に至る叙事文学を歴史哲学的に考察し、小説を近代に特有の文学形式として定式化している。しかし同時にルカーチは、古典的な叙事詩と対比させつつ、近代において成立した小説に対して批判的な評価を下している。ここから、ルカーチが古典的な芸術作品を模範とする擬古典主義的価値観に依拠していることがわかる。こうした擬古典主義的態度は、全体性 (Totalität)を重視するルカーチの思想的傾向に起因するものであり、そこにはヘーゲル哲学の影響が見受けられる。こうしたルカーチの全体性偏重に対して重要な批判を行った人物として、テオドール・W・アドルノの名が挙げられる。アドルノもまたヘーゲル的弁証法の影響下にあったものの、ルカーチが目指したユートピア的な全体性とは距離を置いている。全体性をめぐるこうした議論を取り上げたものとして、アメリカの哲学者であるマーティン・ジェイによる『マルクス主義と全体性』(*Marxism and Totality*)を挙げることができる。この著作でジェイは、全体性をライトモチーフとしてルカーチからユルゲン・ハーバーマスへ至るまでの西欧マルクス主義の思想的潮流を描いているのだが、そ

の一部をルカーチとアドルノをめぐる議論にあてている。その際ジェイは、ルカーチの『小説の理論』における全体性のモチーフについて、『歴史と階級意識』(*Geschichte und Klassenbewusstsein*)に代表されるような後の政治的著作と関連づける形で論じている。これに対してアドルノはすでに初期の仕事においてルカーチに対する批判的な態度を表明しており、そこにはヴァルター・ベンヤミンの強い影響が見受けられる。確かにベンヤミンとアドルノの交流自体は広く知られているものの、ルカーチが描いた全体性の構想に対する反証を挙げる際に、文学に関する著作であるベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』(*Ursprung des deutschen Trauerspiels*)における議論をジェイ自身も援用していることは注目に値する。さらにアドルノは「自然史の理念」(*Die Idee der Naturgeschichte*)と題した講演の中で、自らの掲げる哲学的な課題への解決策としてルカーチ、ベンヤミン両者の文学的著作から引用を行っている。ただし、ジェイによる議論はもっぱら哲学的・政治的領域に限られており、全体性という理念が文学的な領域にもたらした問題は見過ごされている。そこで以下の章では、全体性をめぐるこうした議論を文学の領域に適用することで、ルカーチが擬古典主義的な価値観にもとづいて小説に下した否定的な評価に修正を加え、小説形式が示す近代性を肯定的に捉えなおすことを目標とする。

第一章では、アドルノの講演「哲学のアクチュアリティ」(*Die Aktualität der Philosophie*)を取り上げる。この講演では、哲学における全体性概念の凋落が喫緊の課題として取り上げられる。ヘーゲル以降、19 世紀における哲学の取り組みにおいて全体性という概念はその優位性を保ち続けてきた。しかしアドルノによれば、観念論以来のこうした「大きな哲学(die große Philosophie)」は、20 世紀初頭の時代状況においてはすでにその有効性を失ってしまっているという。そこで彼は、哲学の拠り所となるべき新たな在り方を模索していく。その際アドルノは全体性に代わって「痕跡と破片 (Spuren und Trümmer)」のうちにこそ哲学的認識の基盤を求めるべきだと主張する。アドルノはベンヤミンの「星座的布置(Konstellation)」を引用しつつ、哲学的な認識の媒体が、完結的な全体性から断片的な個別性へ移行したと解釈した。こうした全体性の喪失という状況をつうじて、哲学・文学両分野のあいだの親和性を読み取ることができる。実際、『小説の理論』のなかでルカーチは、作品内から調和的世界観にもとづく全体性が失われたことこそ、近代的文学形式である小説が成立するに至った直接的な原因と見なしている。その結果、周囲の世界から孤立した孤独な個人としての主人公が登場することで、叙事文学において支配的概念であった全体性は個別な存在にその地位を譲ることになる。ただし、アドルノが「痕跡と破片」というキーワードを肯定的なイメージのもと提示したのとは対照的に、ルカーチにおいて個別性は等閑視される。ルカーチのこうした擬古典主義的態度を相対化することが、次章以降の主な課題となる。

第二章では、同じくアドルノによる講演「自然史の理念」について論じる。この講演においてアドルノは、ルカーチの『小説の理論』とベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』に依拠しつつ、「自然史 (Naturgeschichte)」という概念を導入する。自然史は、「自然－歴史 (Natur-

Geschichte)」としても表記され、自然と歴史の対立を示している。本講演におけるアドルノの目的は、この自然史の概念に対する考察を通じて現代哲学の抱える問題を解消することにある。だが、本論文はアドルノがルカーチからは「第二の自然 (die zweite Natur)」、ベンヤミンからは「移ろい (Vergängnis)」のモチーフをそれぞれ引用しているという点に注目する。というのも、これら二つのモチーフは、いずれも文学的な文脈で用いられているものだからである。アドルノの試みにおいては、問題をはらんだ「第二の自然」が、「移ろい」によって相対化されるという図式が成り立っている。ここで、第一章においても指摘した、哲学と文学のあいだの親和性が重要な役割を果たすことになる。文学作品における全体性が喪失したことにより、調和的な世界観を支えていた主体と客体の同一性は疑わしいものとなる。そこでは、かつては主体にとって生き生きとした存在であったはずの客観世界が、異質なものへと変容してしまっている。ルカーチはこれを、作品世界における自我と世界の断絶として解釈する。「第二の自然」というモチーフのうちには、世界から疎外された小説の主人公の姿が反映されている。こうした事態をアドルノは歴史の自然化として捉える。加えてアドルノは『ドイツ悲劇の根源』におけるアレゴリー論を再構成することで、「移ろい」の概念の検討も行っていく。アドルノは、ベンヤミンがバロック悲劇におけるアレゴリー的表現を読み解く姿勢のうちに、自然化した歴史的生を再び生き生きとしたものとして呼び起こす、自然の歴史化を見いだす。こうして「第二の自然」に「移ろい」を結びつけることで、アドルノは自然史の理念を示そうとする。本章では最終的に、アドルノによる自然史の構想を文学的な領域に適用することで、ルカーチが小説に対して下している批判的な評価の修正を試みる。

第三章では、ゲオルク・ビューヒナーによる断片『レンツ』(*Lenz*)の分析をつうじて、前章までに言及した理論的観点にもとづきつつ作中に見られる近代的特徴を具体的な形で提示することを目指す。この作品は 18 世紀に実在した詩人ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツを題材としたものであり、主人公のレンツが療養のために訪れた土地において次第に精神錯乱に陥っていく過程を描いた作品である。ビューヒナーはこの作品を執筆するにあたって、滞在先で詩人レンツの世話にあたっていた牧師オーバーリーンの遺した日記に取材している。ただし、『レンツ』においては牧師の記録が再構成されているだけでなく、著者であるビューヒナー自身が近代という時代に感じ取っていた葛藤も読み取ることができる。作中においてレンツの不安定な精神は、既存の認識のあり方からは逸脱した形で周囲の世界を捉える。彼の認識においては伝統的な主体と客体の同一性が激しく揺らいでいる。その結果レンツは、自然や他者、さらには神からも疎外された孤独な存在として描かれている。そこにはルカーチが近代の主人公の姿に見出した「世界から疎外された主人公」というモチーフを見て取ることができる。主人公のこうした境遇は、ルカーチが『小説の理論』において定式化した小説の主人公の原型ともいえるものとなっている。しかし同時に、『レンツ』のうちには擬古典主義にもとづく調和的な世界観を克服しようとする近代的な自我の姿を認めることができる。

第四章では、ルカーチ『小説の理論』における小説形式の位置づけを、ベンヤミン『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(*Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik*)における議論と比較する。ルカーチは、近代の文学作品において失われた全体性を回復するための手段として、イロニーの機能に着目する。だがルカーチは、古典的な叙事詩における全体性が、予め形成された、いわば先天的な全体性であるのに対して、イロニーによって形成された小説形式の全体性は、後天的で調和に欠けていると批判する。これに対してベンヤミンは、フリードリヒ・シュレーゲルやノヴァーリスといった初期ロマン主義者たちの議論を再構成する。その際、彼らのロマン主義芸術理論の基礎となったヨハン・ゴットリープ・フィヒテの反省理論も参照する。初期ロマン主義者たちはフィヒテからこの反省概念を受容しつつも、独自の芸術理論へ発展させている。具体的には、自らを認識の対象として無限に反省を重ねていく主体、というモチーフがロマン主義芸術理論において重要な役割を果たしている。さらにベンヤミンは、ロマン主義芸術理論の究極的な目標を「芸術という理念(die Idee der Kunst)」としたうえで、この「芸術という理念」を個々の芸術作品、すなわち個別な存在の総体として捉える。すなわち、ベンヤミンにおいては個別が全体に先立っている。このように、ルカーチ的な擬古典主義とベンヤミンの依拠するロマン主義の立場のあいだでは全体性の捉え方が全く異なっている。ルカーチにおいては全体性が個別性に先立つものとして捉えられているのだが、ベンヤミンはこれとは対照的に個別性こそ、全体性を形成する基本的要素であるとみなす。さらに、小説形式はロマン主義者たちにとって他の芸術形式にくらべて特別な位置を占めていた、という点についてもあわせて言及する。

結論ではこれまでの議論を踏まえつつ、小説形式における近代性の再評価を試みる。まず、近代において成立した文学形式を、擬古典主義的価値観に基づいて評価しようとするルカーチの態度は時代錯誤的であり正当性に欠けるといえる。さらに、全体性に代わって個別性が前景化してきた事態のうちには、文学において長らく通用してきた価値基盤の変動という、近代において生じた一種のパラダイムの転換を指摘することができる。最終的に、小説形式は近代において全体性概念に生じた変遷と動揺を体現するものであると結論付ける。